DATA

データで見る産婦
人科医の実態

産婦人科専門医試験受験者を対象に行ったリクルートアンケート結果 (2022年)

【背景】
産婦人科専攻医数は近年増加傾向にあるものの、その傾向は緩徐であり、2024年に医師の働き方改革が開始されることを考えると更なる人員確保が必要である。一方で、医学生や臨床研修医が勤務地や専攻する診療科に求める要素は年々変化しており、産婦人科専攻に影響する因子の探索は重要である。

【目的】
産婦人科専攻の決定に寄与した因子を検証することを目的とした。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が専門研修に与えた影響についても調査した。

【調査期間】
2022年7月25日～2022年10月16日

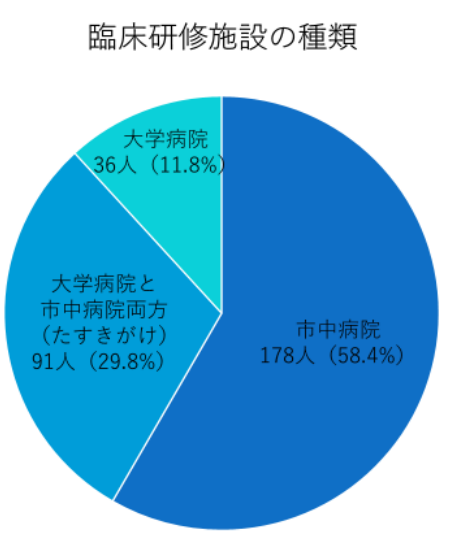
【対象者】
2022年度日本産科婦人科学会産婦人科専門医試験受験者

【方法】
オンラインアンケート
2022年の日本産科婦人科学会産婦人科専門医試験は新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、都道府県毎の受験であり、オンラインでのアンケートを実施した。回収率増加のため、リマインドメールおよびリクルートイベントのチューター経由でアンケート回答を依頼した。

【回収率】
74％（305人/411人）

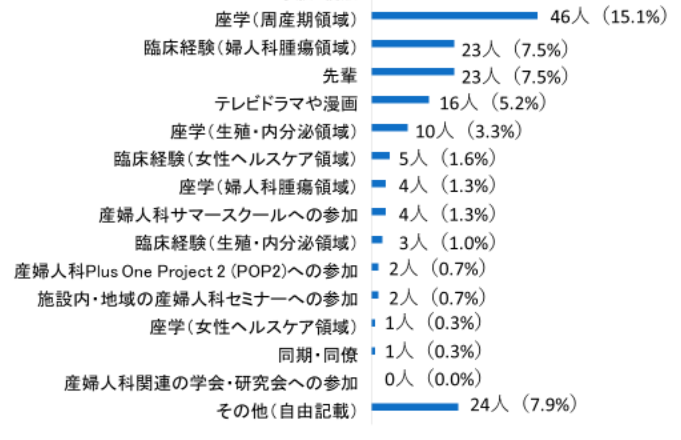
A 背景

項目名		人数（%）
性別	男性	112人（36.7%）
	女性	191人（62.6%）
	無回答	2人（0.7 %）
結婚の有無	既婚	198人（64.9%）
	未婚	100人（32.8%）
	無回答	7人（2.3%）
子の有無	あり	122人（40.0%）
	なし	171人（56.1%）
	妊娠中	8人（2.6%）
	無回答	4人（1.3%）
家族・親戚中の産婦人科	両親	50人（16.4%）
	祖父母	21人（6.9%）
	兄弟姉妹	10人（3.3%）
	その他	16人（5.2%）
	いない	235人（77.0%）

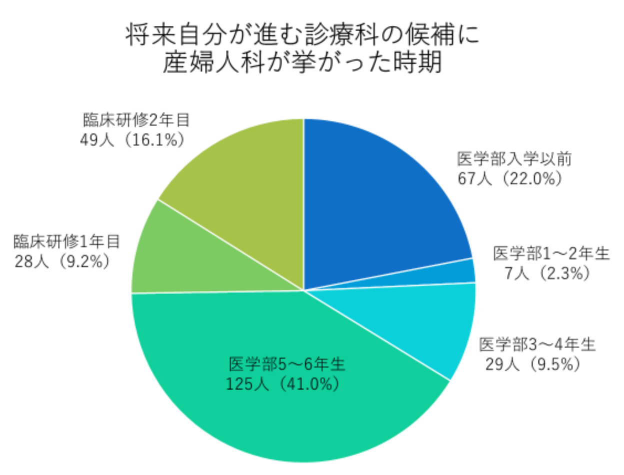

臨床研修施設の種類

性別は男性112人（36.7%）、女性191人（62.6%）、無回答2人（0.7%）であった。男女比では女性が高く、昨年度（61.5%）、一昨年（55.8%）と比較して増加した。専門医試験を受験する時点で回答者の男女に関わらず子供がいる者は40.0%、妊娠中の者は2.6%で、昨年と大きな変化はなかった。家族・親戚の産婦人科の割合も昨年と大きな変化はなかった。
臨床研修病院の種別は、大学病院36人（11.8％）、市中病院178人（58.4％）、大学病院と市中病院両方（たすきがけ）91人（29.8％）であった。昨年度と比較して、たすきがけが増加し、大学病院が減少した。

B 産婦人科専攻が候補に挙がった理由・時期

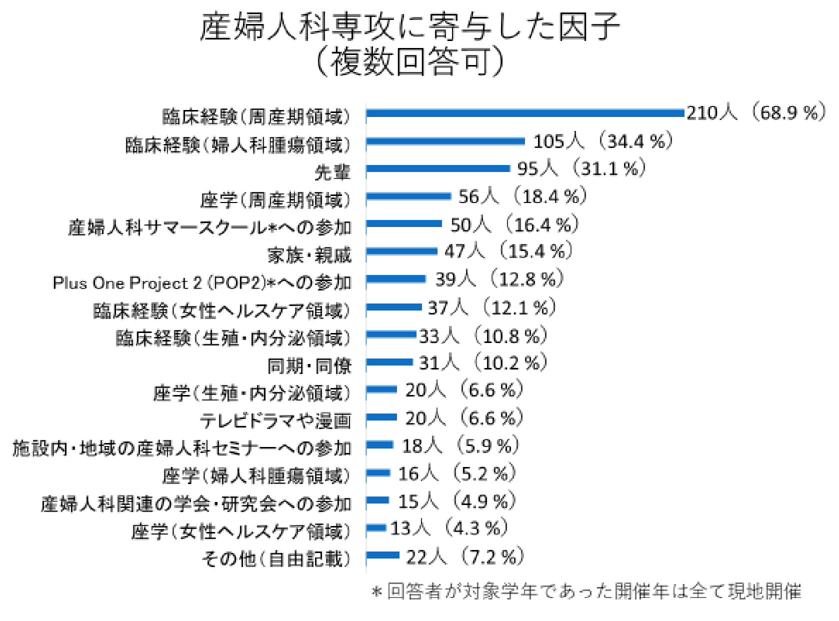

産婦人科が候補に挙がった最初のきっかけ

産婦人科専攻が候補に挙がった理由は、昨年同様に周産期の臨床経験（94人、30.8％）が最多で、家族親戚の影響（47人、15.4％）、周産期の座学（46人、15.1％）と続いた。

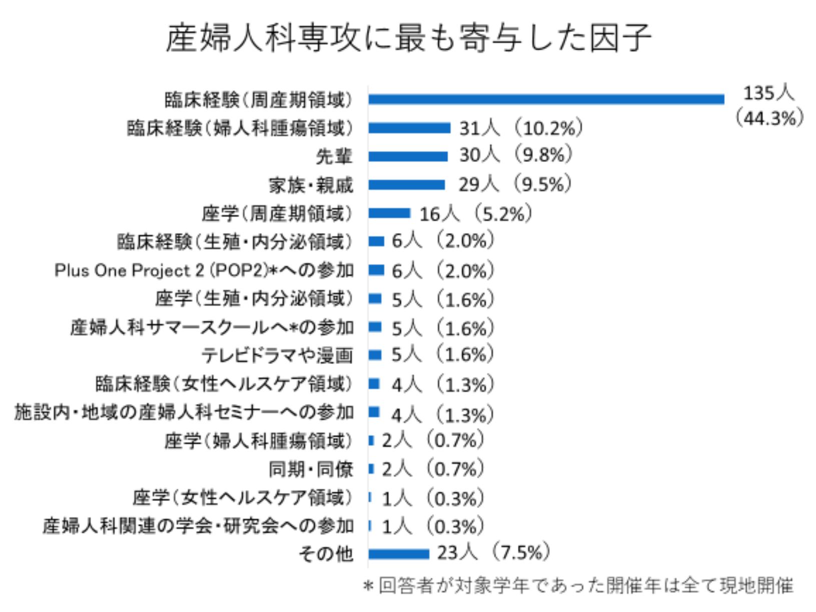

将来自分が進む診療科の候補に
産婦人科が挙がった時期

産婦人科専攻が候補に挙がった時期は、昨年同様に医学部5～6年生（125人、41.0％）が最多で、医学部入学前（67人、22.0％）、臨床研修2年目（49人、16.1％）と続いた。

C 産婦人科専攻に最も寄与した理由、専攻を決定した時期

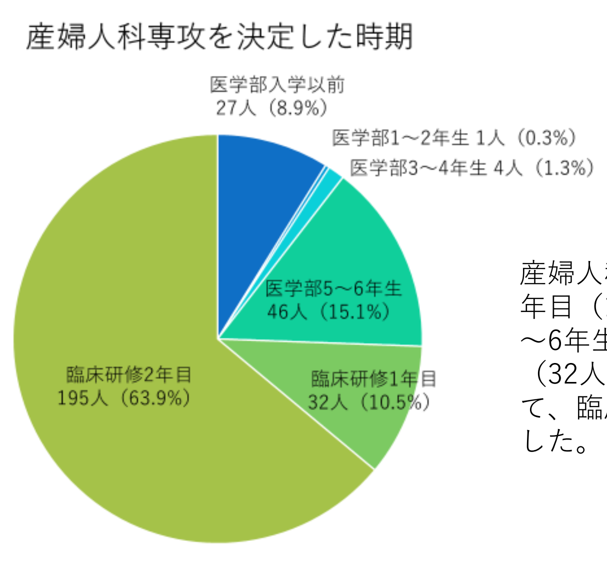

産婦人科専攻に寄与した因子
（複数回答可）

＊回答者が対象学年であった開催年は全て現地開催


産婦人科専攻に最も寄与した因子

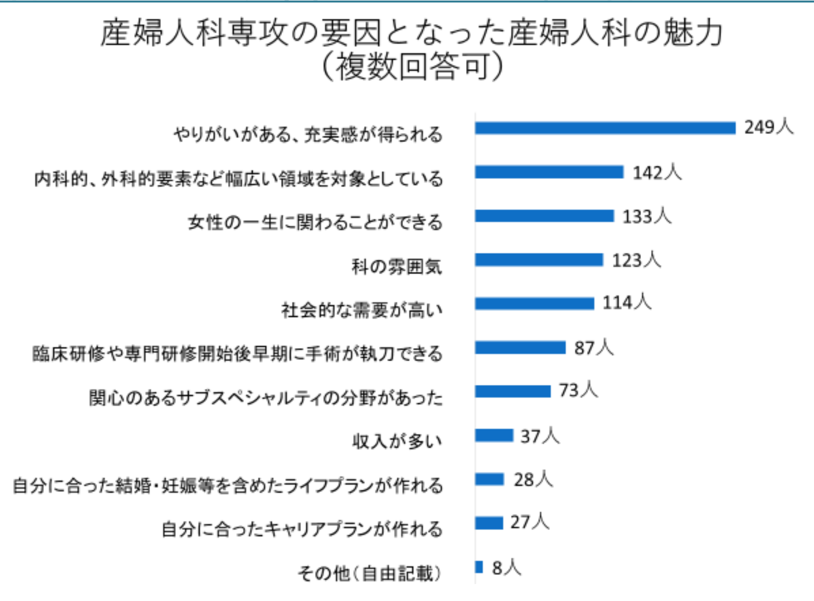
＊回答者が対象学年であった開催年は全て現地開催

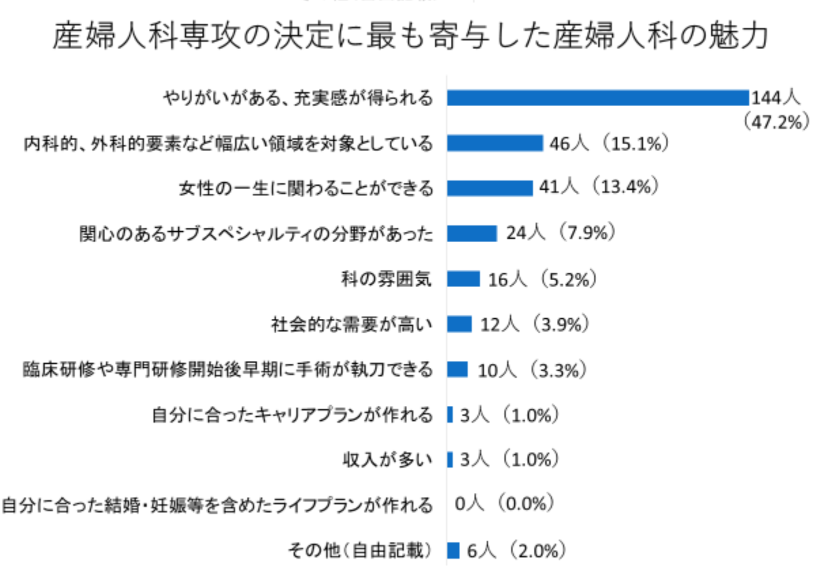
産婦人科専攻に寄与した理由は、周産期の臨床経験が最多で、婦人科腫瘍の臨床経験、先輩の影響が続いた。産婦人科専攻に最も寄与した理由は、周産期の臨床経験（135人、44.3％）、婦人科腫瘍の臨床経験（31人、10.2％）、先輩の影響（30人、9.5％）、家族・親戚の影響（29人、9.5％）が上位を占めた。昨年同様に周産期の臨床経験が最多であったが、昨年と比較し、婦人科腫瘍領域の臨床経験、POP2の割合が増加した。


産婦人科専攻を決定した時期

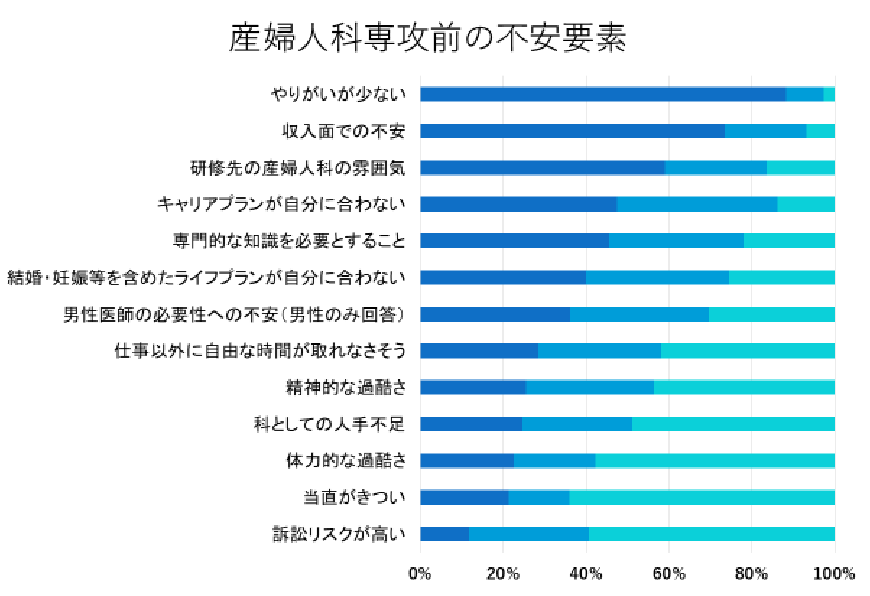
産婦人科専攻を決定した時期は、臨床研修2年目（195人、63.9％）が最多で、医学部5～6年生（46人、15.1％）、臨床研修1年目（32人、10.5％）と続いた。昨年と比較して、臨床研修開始後に決定する割合が増加した。

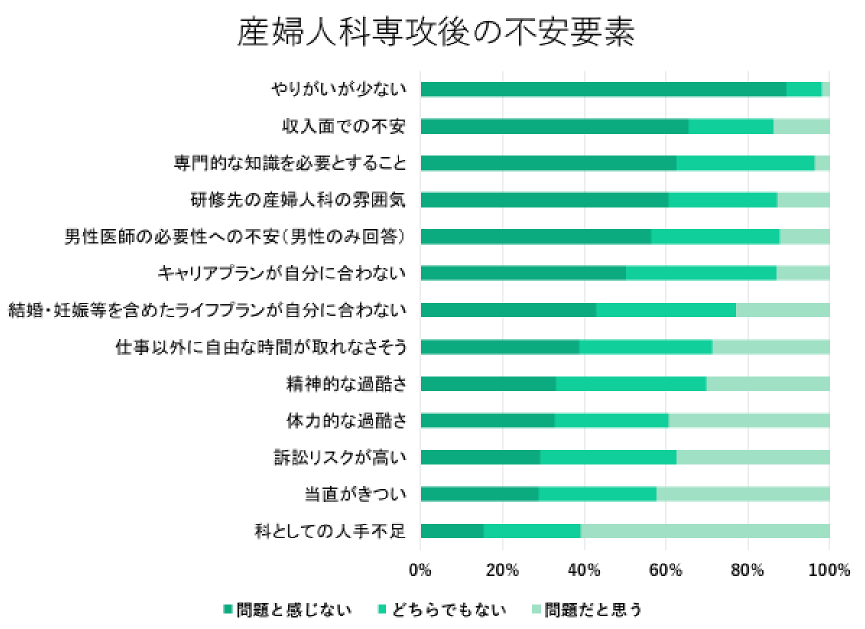
D 産婦人科を専攻する要因となった産婦人科の魅力・不安


産婦人科専攻の要因となった産婦人科の魅力
（複数回答可）


産婦人科専攻の決定に最も寄与した産婦人科の魅力

産婦人科の魅力としては、例年通りやりがい・充実感が最多で、幅広い診療領域、女性の一生に関わることができる、科の雰囲気、社会的な需要の高い、の順で挙がった。自由記載として、出産にかかわることができる、「おめでとう」が言える、親からの継承、患者年齢が比較的若いなどが挙がった。

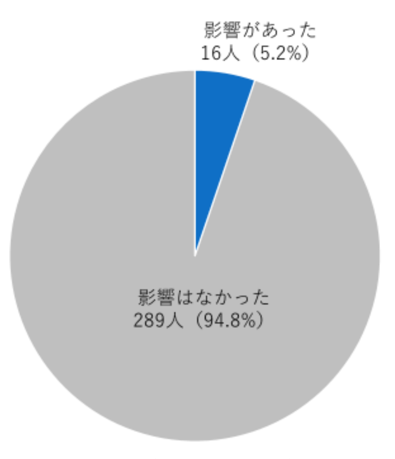

産婦人科専攻前の不安要素


産婦人科専攻後の不安要素

産婦人科専攻前の不安としては、例年同様に当直がきつい（195人、63.9％）、訴訟のリスク（181人、59.3％）、体力的な過酷さ（176人、57.7％）、人手不足（149人、48.9％）、精神的な過酷さ（133人、43.6％）が多かった。実際に産婦人科医になった後は、ほとんどの不安は低減していたが、人手不足については半数以上が「問題がある」と回答した。

D 新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響

産婦人科専門研修の修了要件の達成に
新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は影響したか？



具体的な影響
- 手術件数の減少（6例）
- 不妊症例経験数の減少
- 分娩数の減少
- COVID診療の負担で産婦人科医療ができない
- 勤務制限による人手不足
- 院内感染による自身の勤務停止
- 院外研修の延期

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）によって産婦人科専門研修の終了要件の達成に支障が出たのは16人（5.2％）で、昨年度（6.4％）と大差なかった。理由としては、手術などの症例数の減少が挙げられた。

E 考察

今回のアンケートでは、2022年度産婦人科専門医試験受験者を対象とした。産婦人科専攻決定に寄与した因子の調査を目的とし、産婦人科を専攻の候補に挙げた、または専攻として決定した理由・時期、そして産婦人科の魅力や不安などについて調査した。また、今年度も新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が産婦人科専門研修に与えた影響を聴取したが、経験症例の減少と勤務制限による影響はあったが、昨年度と同様にその影響は限定的であった。

背景としては、男女比は女性が62.6%で、昨年度（61.5％）、一昨年度（55.8%）と割合の増加が続いた。また、全体のうち男女に関わらず40.0%が育児中で、妊娠中の医師は2.6％いた。一部の専攻医は育児や妊娠と並行して研修に取り組んでおり、全国で柔軟な専攻医研修制度の検討が望まれる。

産婦人科専攻が候補に挙がるきっかけとして、周産期分野に関わる因子や周囲の人間関係に関わる因子が多くを占めたのは例年通りだが、一方で「婦人科腫瘍の臨床経験」がきっかけになったという専攻医が7.5%と、前年の4.8%より上昇した。最終的に産婦人科専攻を決定した因子に、“臨床経験”が多いことを考えると、領域に関わらず、臨床現場を感じてもらうことが学生・研修医に産婦人科の魅力を伝えられるポイントだと思われた。アンケート対象者たちは、臨床研修の産婦人科研修を選択して研修した年代であり、医学部5-6年生の臨床実習で産婦人科に好印象を得た可能性が高い。裏を返せば、医学部5-6年生で好印象を持てることが必須であったといえる。しかし、2020年度から臨床研修における産婦人科研修が必修となったことで、産婦人科の臨床現場にすべての研修医が触れることができる。これはグラフにある「臨床研修2年目、1年目」で産婦人科に興味をもったとする25.3%を増やせる可能性があり、研修現場としてもこの必修化を産婦人科の魅力を伝えられる機会と捉えていただき、学会としては“充実した臨床経験”を各施設が提供できるようなサポートを提案できることが望ましい。

また、産婦人科未来委員会の活動では、サマースクール（50人、16.4%）、産婦人科Plus One Project 2（39人、12.8%）も産婦人科専攻に寄与した。全国の医学生・臨床研修医、先輩産婦人科医との交流、産婦人科診療体験など、普段の講義や診療では得られない経験も、産婦人科専攻の決定要素になり得ることが示唆された。また、2020年度から始まった『Welcome to OBGYN World!（WOW!）』は、対象を医学部1-4年生としているため、まだその効果は確認できないが、産婦人科に触れる機会がほとんどない学年に産婦人科の魅力を伝える事のできるイベントとして期待したい。

産婦人科の魅力と不安要素についても調査した。産婦人科専攻前には半数以上が不安要素だったとしたが、専攻後には半数以下に転じたのが、「体力」「当直のきつさ」「訴訟リスク」だった。実際に働かないと実感できない点ではあるが、学生・研修医が不安に思いやすい点として認識し、リクルート活動では具体的なデータと対策を紹介して、不安払拭を図ることが望ましい。一方、人手不足については、産婦人科専攻後も不安は低減しなかった。学会を通じて2024年の医師働き方改革に向けた人材の集約化や労働形態の見直しに着手しており、今後の改善が期待される。

以上

2023年 2月(令和4年度)

日本産科婦人科学会産婦人科未来委員会内若手委員会
リクルートアンケートワーキンググループ

未来委員会
磯部 真倫、末光 徳匡

若手委員会
竹森聖、青柳陽子
道佛 美帆子、三宅 龍太、イズデプスキ龍也、山本健太
今泉絢貴、當麻絢子、上條恭佑、川上穣、村上亨、福井大和、吉田智昭